

研究ノート

W・C・ミッチェルの生涯と業績（Ⅰ）

—ミッチェル研究序説—

佐々野 謙 治

は し が き

J. シュンペーター (Joseph A. Schumpeter) は、ウェズレイ・クレア・ミッチェル (Wesley Clair Mitchell) についての評伝を次の叙述をもって始めている。「ミッチェルは、1948年10月29日に死んだ。——かつて私に書を寄せてそうありたいと言ったように、＜執務中＞最後まで活動しながら。このたぐい稀な清純の人、堅固な確信と限りない有情とを兼ね備えた同僚、ひたすら義務に専念した教師、あらゆる誘惑を、例えそれが社会への温く高潔な同情から出た微妙なものであっても、一切受けつけない不屈の真理の使徒、自己の権威を、と言うより自己の主張を何もかも強調せずに事例に従った指導者、我々はこの人を悼む。このような品性の発する香気は、彼に近づく人の誰でも感受できるし、また感受したのに、それを言葉で表現することは、彼の広範な関心や彼が非常に多くの問題になした有効な奉仕——目にユーモラスな輝きを絶やさなかったが極めて厳格な態度で彼がなしたその奉仕——がそうであるのと同じく、困難である。我々は彼を愛した。我々はこのように人に再び会えるかを知らない。¹⁾」

以上シュンペーターが評したミッチェルは、学説史上、ヴェブレンにつぐ、いわゆる「アメリカ制度学派」の代表者と見なされている。しかし、一体かく見なされる根拠は何なのか。一体ミッチェル学説の何が、彼をして制度主義者と呼ばせしめるのか。もともとヴェブレンとミッチェルをつなぐものがあると

して、その内実はいわゆる「アメリカ制度学派」として二人の総括を許すがごとき性質のものなのか。——問題は多い。しかもこれらの問題が、今までのところ必ずしも明確にされているわけではない。何よりミッチェルの学説そのものに内在した検討が望まれるが²⁾、さしあたり小稿では、ミッチェルの生涯と業績を概観・整序することに努めたい³⁾。それを通して、上述した諸問題を考えていく上での手掛りをつかむこと、これが小稿の課題である。

<注>

- 1) J. シュニペーター著、高橋長太郎訳「ミッチェル」中山・東畑監修『十大経済学者』日本評論社、昭和21年、885頁。ただし、訳文は必ずしもそのままではない。
- 2) 外国におけるミッチェルについての論文や研究書ないし解説書については、Arthur H. Burns (editor), Wesley Clair Mitchell: The Economic Scientist, National Bureau of Economic Research, Inc., New York, 1952, pp. 376-374 に詳しいので、さしあたりその参照を乞う。とまれ、外国におけるミッチェルについての解説書や研究書は、論文まで含めるとかなりの数にのぼる。しかるに我が国においては、私の知る限り、ミッチェルを取り上げた独立の研究書は一冊もない。せいぜい、学説史や思想史の概説書の一部として論じられているにすぎない。ミッチェルについて多少まとまった叙述をしている学説史ないし思想史の文献に次のものがある。小原敬士『アメリカ経済思想の潮流』勁草書房、昭和26年、213～221頁。桜林誠「アメリカ制度学派」大河内一男編『歴史学派の形成と展開』経済学説全集、第5巻、河出書房、1956年、301～308頁。久保芳和「制度学派」多田・久保編著、『経済学説』学文社刊、昭和48年、117～118頁。長守善『経済学史』東洋経済新報社、昭和41年、204～206頁。田中敏弘「アメリカ制度学派」杉原・吉沢編『講座経済学説史』V、同文館、昭和52年、55～59頁。また W・C・ミッチェル著、春日井薫訳『景気循環—問題とその設定』文雅堂書店、昭和36年、1～3頁には、極めて短いものだが、春日井氏によるミッチェル評伝が収録されている。なお我が国でミッチェルを取り上げた論文には、次のものがある。佐々木晃「ウェズレー・C・ミッチェルのアダム・スミス経済理論の類型に関する見解」経済集志、第42巻第2号、1～19頁。「制度派経済学者たちとジェレミー・ベンタム —W・C・ミッチェルの快樂主義心理学批判を中心として—」日本大学経済科学研究所紀要(3)、1978。岡本典子「W・C・ミッチェルのアダム・スミス観」和光大学経済学部創立10周年記念号、2、1977、49～66頁。また田中敏弘「アメリカ制度学派とドイツ歴史学派」関西学院大学経済論究、第32巻第4号、23～28頁には、ミッチェルの歴史学派についての見解が整理されている。
- 3) 小稿を作成するに当たっては、主に Arthur F. Burns (editor), Wesley Clair Mitchell: The Economic Scientist, National Bureau of Economic Research, Inc., New York, 1952 —以下、当著作は略してⓂと記す—に収録されている下記の論稿を参考にした。Arthur F. Burns, Introductory Sketch. Lucy Sprague Mitchell, Personal Sketch. Joseph Dorfman, Professional Sketch. Frederick C. Mills, Professional Sketch. John Maurice Clark, Memorial

Adress. Joseph H. Willits, Memorial Adress. Sphepard Morgan, Memorial Adress. これらの論稿からの引用は、以下すべて、論稿執筆者名と、その論稿が収録されている上掲書の該当頁のみを記すことにする。（例：Joseph Dorfman, ⑧, p. 127.）なお付言させていただくなら、上述の諸論稿を、私は私のゼミの学生数名と一緒に読んだ。特に原吉則君（3年）と久富学君（4年生）には、小稿をとりまとめるに当って、その作業過程に直接参加してもらった。ここに記して感謝したい。

I

ウェズレイ・クレア・ミッチェルは、1874年8月5日、田舎医者ジョン・ウェズレイ・ミッチェル（John Wesley Mitchell）とその妻ルシイ・メドラ（Lucy Medora）の7人の子供中、第二子・長男として、イリノイ州のラッシュヴィル（Rushville）に生れた。クレア——少年時代のウェズレイ・クレア・ミッチェルはかく呼ばれていた——は、「並はずれて体の大きな、丈夫な少年」として育ちつつあった、と言う²⁾。しかし写真に見る成人した彼は、決して大柄だとの印象を与えない。彼は実は14才の時にリウマチ性の熱病にかかっている。「ミッチェル家の男達のほとんどが背が高いのに、 かるうじて人並」という彼の身長は、その病気が彼の成長を阻んだからではないか、と言われている。またその病気は、彼の心臓に後々まで不正音を残すことになった。4年後クレアを新入生として診察したシカゴ大学の医者は、その不正音を聞き、「君はもはや一年はもつまい」とクレアに注告した、と言う。はなはだしい誤診であった。クレアは73才まで生き、しかも実に精力的な生涯を送った。「……青年時代も70才になっても、彼は体を旺盛に使い、そうすることに喜びを感じた」とクレアの妻は語っている³⁾。何よりもここで我々を驚かすのは、大学に入学したばかりの少年クレアが、医者に一年もつまいと言われても、それをしばらく誰に告げることもなく勉学を続けたということだ。一体クレアは、いかなる両親の下に、どのような少年時代を過したのであろうか。まず、この点を概観することから始めたい。

クレアの父、ジョン・ウェズレイ・ミッチェル（John Wesley Mitchell）は、1873年12月メイン州のアヴォン（Avon）の一農場に生れた。12子中11番目の子供であった、と言う。もともと、ニュー・イングランド³⁾ 出の小規模の漁業か

農業を生業としてきた家系にあって、順調にいけばジョン・ウェズレイ・ミッチェルも、農民として暮しをたてるはずであった。ところが、彼は5才の時に足をくじき、その傷がもとで骨の結核を煩った。もはや農業での生活が無理だと考えた彼の父は、彼に教育を受ける機会を与えた。こうして彼はメイン州の医学校に学び、そこを医者となって1863年に卒業した。時は南北戦争のただ中であつた。卒業と同時に彼も軍医としてその戦に加つた。その際、負傷した黒人兵が白人と同じ手当を受けていないことを知つた彼は、自ら進んで黒人兵の軍医になった、と言われている。そこでの功績が認められ、彼は陸軍大佐にまで昇進した。戦も今や終結しつつあつた時、彼を二度目の不幸がおそつた。あばれ馬から振り落されて、かつて痛めたことのある足を、またしても折つてしまったのだ。それも完全には二度と回復できない程の重傷であつた。(事実、それ以後の彼は余り健康のすぐれない生涯を送ることになる)。しかし彼は、それにくじけず、ニューヨークの医科大学で医学の勉強を続けた。それから彼は西へ移動し、シカゴで医院を開業した。そしてこの地で彼はイリノイ州出身の娘と結婚した⁴⁾。

こうして見てくると、クレアも記しているように、彼の父は実に「旺盛な進取の気性」の持主であつた、と言えるだろう。なおクレアの妹はこう記している。父は「衣服に凝る、上品な紳士で、楽しい話好きな人でした。父は熱心な読書家でしたし、我々の手許に図書館の本がとぎれたことはありません」と⁵⁾。クレアがまた、後に見るように読書好きであつたが、それは彼の父ゆずりであつたわけだ。

クレアの母、つまりジョン・ウェズレイ・ミッチェルがシカゴで結婚したイリノイ州出身の娘ルシイ・メドラ・マックルラン (Lucy Medora McClellan) は、1847年5月5日、イリノイ州のヨークヴィル (Yorkville) の農場に生れた。3才にして実母と死別した彼女は、彼女の伯母にあたるビューラー・マックルラン・スィーリー (Beulah McClellan) の養女として、シカゴで育てられた。自由な恵まれた環境の中で令嬢としての教育を授けられたらしく、彼女は主に音楽と仏語を、ワシントンの学校とオーバーリン (Oberlin) 大学——この

大学は婦女子や黒人の入学を初めて許したそれとして知られている⁶⁾——に、それぞれ一年在席して学んでいる。こうして受けた教育のせい、彼女の考はすべて時代に先んじていた、と言う。つまり彼女は婦人の権利を信じていた。しかもその権利は、ただ政治的権利のみならず、教育や職業生活における権利であり、産児制限の実施に関する権利でもあった。彼女は「物ごとをありのままに見る稀な人々の一人」であった。宗教に関しても彼女は決して自分のそれを他人に押しつけたりはしなかった。子供の頃のクレアは、大伯母さんの信仰するバプテストの教会へ通い、そこでの伝統的なやり方に従って洗礼を受けた。後に彼は、父親の信仰するメソジストの教会に通ったが、ついにそれもやめてしまった。それでも彼の母は、とりたてて心配はしなかった。子供の自主性を重んじる母親であつたらしく、子供達が悪いことをしても直接しかることはなかった。彼女は「愛情に満ちた賢い人」で、子供達が自ら反省し自らの誤を悟るように仕向けた、と言う。体は小柄な人であつたらしいが、クレアの妻はこう語っている。「彼女の大きさからは、彼女が非常に長い間病氣をしていた夫の世話をし、11年間に7人もの子供を生む程の屈強な強さをもっていようとは想像だにできなかった」と⁷⁾。もちろんそれは、彼女の性格の強さもあざかってのことであつたはずだ。父はもちろん母も、「他にはどこにも見い出せない程の強い性格の持主」であつた⁸⁾、とクレアは記している。

さて、シカゴで結婚したジョン・ウェズレイ・ミッチェルとルシイ・メドラは、ラッシュヴィル (Rushvill) に移り住んだ。すでに見たように、クレアはこの地で彼らの第二子・長男として生れた。しかしその後もクレアの両親は、次々に生れてきた子供と共に、ある町から他の町へと転々と住を変えた。それは、父の健康や経済上の問題もさることながら、何よりもすべての子供に十分な教育の機会を与えるためであつた、と言われている。教育こそが「子供らの両親にとって最も重要な事柄であつた⁹⁾。」

かくしてミッチェル家の家族は、かなり大きなディケイター (Decatur) という町へ落착き、そこで果樹園を営んだ。後に郊外に大きな家も得たが、この家の一室が、病弱の故に田舎医者としての激務に耐えられない父の診察医（コ

ンサルタント)としての仕事場に与えられた。またこの大きな家には、かつてクレアの母を養女として養い育てたスィーリー家の大伯父と大伯母も、一緒に住むようになった。ミッチェル家の子供達は、この大伯母を、「スィーリーおばあさん」と呼び心から愛した¹⁰⁾、と言う。またクレアは、母と、特にこの大伯母さんからの精神的影響を強く受けたらしい。大伯母さんとクレアは神学上の議論を好んでした。この大伯母さんとの議論を通して、少年時代のクレアは、論理的な思考と若い知性をみがいたのである¹¹⁾。その模様をクレアは次のように伝えている。

「彼女(＝大伯母)は最良のバプチストでし、また主なる神がこの世をいかに計画したかを正確に知っていました。神は愛である。神は救いを計画した。神は洗礼を命じた。神が定めた道を歩かない人々の破滅は避けられない、という神の不変の言葉には、何んらの疑いもない。かくして地獄は神の名誉を汚すものでもなければ、愛と矛盾するものでもない……私は論理と思考が大好きであった。しかし彼女は、それを価値のないものとして退け、正しくバステスマを受けていない99人をも永遠に燃えさかる炎から救い出す内密の方法が見い出されるにちがいない、という希望を述べた。しかし私も聖書を読んでおり、天上の主権者の性質について私なりの意見をもち始めていました。また、この世での神の信奉者達が、今すぐこの場所で彼らに約束されたところのものを得ていそうにもない、ということに私は気付きました。私は私の大伯母が処理できない論理的に難解なものをこねあげては、いたずらっぽく喜んでいたので。彼女は常に論理体系の中にはまり込んでしまい、私がとりわけ関心をもつようになっていた事実を見て見ぬふりをするのでした¹²⁾。」

ところで、ディケイターに落ち着き、そうこうしているうちに、クレアの父の病気が再発・悪化し、一日の大半をベッドで過さざるをえなくなった。ここに早くも、ミッチェル家の長男であったクレアに、家族への責任が重くのしかかってきた。彼は弟達と一緒に、放課後や休暇を利用して果樹園での農作業を手伝った。また、父が投機目的で建てた家の家賃の徴収——これをクレアはすごく嫌っていた——も、クレアの仕事であった¹³⁾。その頃をふり返ってクレ

アはこう記している。私は余りにも早くから「お金の問題を考え、人生の厳しい側面を学ばなければならなかった。まぎれもなくこの事実が、私の読書志向と……想像の世界を強めました。私は、一人の少年がかかえるには余りにも大きい心配事から逃れる避難所を必要としました。そしてこの避難所を、私は時々思い出しては我々の古い図書館に見い出したのです¹⁴⁾」と。かくしてクレアは、学校と農場での仕事以外の時間の大半を、読書に費したのである。こうした読書の他、スーリー大伯母さんとの神学上の論議はもちろん、蝶の収集——クレアはこれを観察者の目をもってした——も、この頃のクレアの楽しみの一つであった、と言う。

こうして見てくると、クレアが育った家庭は、総じて、決して金銭的に恵まれた家庭ではなかったことがわかる。にもかかわらず、その家庭内は実に明るかった。また「子供達は互いに助けあい、そして彼らの両親を愛し崇めていた¹⁵⁾。」クレアの妻は、この点を次のように記している。「ミッチェル家における家族の絆は極めて強かった……この強い家族感情は、少年クレアが育てられた家庭の実際的狀況と、それにもましてこの家庭の目に見えない雰囲気によって得られたものでした。クレアの姉・長女はこう言っている、＜我々はオリンパスの山で生活しました＞、そうです、金銭上の多くの苦勞や絶えず父の健康が気掛だったにもかかわらずそうでした¹⁶⁾、と。」

クレアが姉に手をひかれて最初に学校に行ったのは6才の時であった。姉は、その時の彼をとてはにかみやさんであった、と記している。しかし、そのはにかみや性も長くは続かなく、また彼の学校での成績はすばらしく良かった。ディケイター (Decatur) の高校に入ってから彼は、年上の少年と、成績においても討論会においても、常に首席を争った¹⁷⁾。——「詩を愛し、会話の正確さや英語のリズムに細心の注意を払った」¹⁸⁾ 彼は、特に討論に興味を示した、と言う（そしてこの討論への興味は彼の大学時代にまで持込まれた）。高校も高学年となり、そろそろ大学進学の問題を考えるようになった頃、クレアはシカゴに大きな大学が設立されることを聞き知った。そこで十分な教育が受けられるだろうという点はもちろん、そこだと休暇中など充分に家の手伝いもでき

るだろうということから、彼はそのシカゴ大学に入学する決心をした。しかし、当時彼が通学していた田舎のディケイターの高校は、その大学に入学するために必要な充分な科目を教えていなかった。そこで、自分でその不足を補わざるをえなくなった彼は、高校の最後の年の大部分を、受験勉強に費した。また短い期間ではあったが、彼はシカゴ近くのモーガン (Morgan) 公園内にある予備校にも通って、入学に必要な科目を勉強した¹⁹⁾。

かくしてクレアは、1893年、シカゴ大学に入学した。クレアが、「君の体は一年もつまい」との注告を受けたのは、この大学に入学してすぐの健康診断においてであった。彼は夏期休暇で家に帰るまでは、そのことを誰に告げることもなく勉学を続けたのである。

<注>

- 1) Lucy sprague Mitchell, ㊦, pp. 55-56を参照。
- 2) Lucy sprague Mitchell, ㊦, p. 56を参照。
- 3) ウェズレイ・C・ミッチェル自身は、中西部に生れ、カルフルニアやニューヨークに成年期を過したが、「彼の思想や生活のパターンの中には、ニュー・イングランド的気風・気質といったものが常に残っていた」と言われる。(Frederik. C. Mills, ㊦, p. 107).
- 4) Lucy Sprague Mitchell, ㊦, pp. 56-57 と Frederic C. Mills, ㊦, p. 107 を参照。
- 5) Lucy Sprague Mitchell, ㊦, pp. 56-57 を参照。
- 6) Antonio Montaner, Der Institutionalismus als Epoch amerikanischer Geistesgeschichte, Töbigen, 1948, S. 57.
- 7) Lucy Sprague Mitchell, ㊦, p. 57-59 を参照。
- 8) Letter to Lucy Sprague, October 18, 1966. in Lucy sprague Mitchell, ㊦, p. 62.
- 9) Lucy sprague Mitchell, ㊦, p. 59.
- 10) Lucy Sprague Mitchell, ㊦, pp. 59-60 を参照。
- 11) Frederick C. Mills, ㊦, p. 108 を参照。
- 12) Letter from W. C. Mitchell to J. M. Clark, in Lucy Sprague Mitchell, ㊦, p. 94.
- 13) Lucy Sprague Mitchell, ㊦, p. 60 を参照。
- 14) Letter to Lucy Sprague, October 18, 1911. in Lucy Sprague, ㊦, pp. 62-63.
- 15) Authur F. Burns, ㊦, p. 7.
- 16) Lucy Sprague Mitchell, ㊦, p. 56.
- 17) Lucy Sprague Mitchell, ㊦, p. 60.
- 18) Frederick C. Mills, ㊦, p. 108.
- 19) Lucy Sprague Mitchell, ㊦, p. 60.

II

クレアつまりウェズレイ・クレア・ミッチェルが入学したシカゴ大学は、石油独占資本家ジョン・D・ロックフェラー（John D. Rockefeller）の遺産によって設立された大学であった。しかしそれは、古くからあったシカゴ・バプテスト大学を基礎としており、当時のアメリカ高等教育の一般的特徴である神学的伝統に従っていた。だから、ハーパー（Willam R. Harper）学長以下の教授の中には、宗教的色彩を有している者が少なくなかった。経済学のラフリン（J. Laurence Laughlin）、チェンバリン（Thomas Chamberlain）、社会学のスマール（Albion Small）、歴史学のホルスト（Von Holst）、政治学のジャドスン（Herry P. Judson）がそうであった。しかし初代学長ハーパーは、36才の気鋭で有能な大学経営者であった。彼は少なくとも最初の間は、その新興大学に全国各地から進取の学者を集めることに熱意をもっているかに思えた。事実シカゴ大学には、それぞれの学問分野の最も新しい傾向を代表する優秀な学者が集まっていた。経済学のソースタイン・ヴェブレン（Thorstein Veblen）、天文学のアルバート・マイケルスン（Albert Michelson）、生理学のジャク・レープ（Jacques Loeb）、詩人のウィリアム・ムーディ（Willam V. Moody）、文学のオスカー・トリッグス（Oscar L. Triggs）、人類学のフレドリック・スタール（Frederic Star）、哲学および心理学のウィリアム・カールドウェル（William Caldwell）、哲学のジョン・デューイ（John Dewey）、社会学のフランツ・ボアス（Franz Boas）、社会心理学のウィリアム・トーマス（Willam Isaac Thomas）等がそれである¹⁾。こうした「進取の精神に満ちた真のきら星の一団²⁾」を擁した大学、ミッチェルによれば、「当時どこにも見い出せないほどの最も刺激に満ちた社会科学の学校³⁾」、これが当時のシカゴ大学であった。

さて、そのシカゴ大学に入学した当初のミッチェルは、古典を専門に学ぼうとしていた。入学試験準備の過程でローマの詩人ホラチウス（Horace）の詩に特に感動させられていたからだ⁴⁾。しかしミッチェルは、すぐに哲学と経済学

に関心を移した。この点で、彼に影響を及ぼしたのが、とりわけデューイとヴェブレンであった。以下、当時を回想したミッチェル自身による生々きとした叙述を借りよう。

「私は哲学と経済学とをほぼ同時に勉強し始めました。この二つの学科の類似性に私はすぐ気付きました。教科書や教師によって偉大な諸哲学が示された時、私はそれらの間にある相違を把握することに少しも困難を感じませんでした。経済理論の方はもっとやさしかったと思います。実際、形而上学者の綿密性に比べると、経済学の一連の諸体系は粗雑なものに思われました。(学生達がするように) プラトン (Plato) からグリーン (T. H. Green) までの範囲を学んだ後では、ケネー (Quesnay) からマーシャル (Marshall) までの範囲は、より小さな題目にすぎない、と私は思いました。理論の技術的な部分は容易なものでした。前提を与えられたなら、私は長々と思索の綾を織りなすことができました。また私は＜演繹＞が不毛であることを知るようになりました⁵⁾

.....

そうこうしているうち、私は哲学と経済学の中で真に興味のもてるものを探し求めていました。ジョン・デューイは種々の題目で講義を行っていましたが、そのすべてが同じ問題つまり考え方の問題を取り扱っていました。私は論理が人間行為に適用される場についての彼の見解に魅了されました。それは経済理論家達を問題にしていました。なすべきことは、経済理論家達がいかにして一定の問題に取り組むようになったか、つまり何故彼らは一定の前提を当然のことと見なしたのか、何故彼らは論理的に起りうる諸問題のあらゆる置換や変形を考えなかったのか、何故同時代人の彼らが彼らの結論を意義があると思ったのか、ということを明らかにすることでした。また、もし誰かが建設的な理論化を手がけようと願ったなら、デューイの注意は、まさにその道を指示するものでした。消費者が買物をする時、むずかしい理論で品定めをするのだと想定するのは誤った考です。強制される場合を除けば、彼らがあれこれ考えることはないからです。一定の原理からいかに彼らが行動するかを引き出す方法はありません。と言うのは、彼らの行動それ自体が合理的ではないからです。だが

人は彼らがいかに行動するかを見い出さなければなりません。それは観察の問題です。しかしそれはまた、これまでの経済理論家が余りにも軽く扱ってきた問題です。こうして理論家達の頭の中での諸操作が問題として取り上げられ始めた時、経済理論は私にとって大変魅力ある主題となりました。中でも正統的タイプの理論はことにそうでした⁶⁾。

もちろんヴェブレンは以上の見解に完全に一致していました。私が彼にひきつけられたのは、彼の芸術家的な側面でした……私は逆説にいかれていました、例の地獄は神の愛によって設けられたというやつです。ところで、ヴェブレンは美しい巧緻なものを展開する名人でしたが、私は明白さを強調する初心者でした……ここに観念を玩びえた一人の男がいたのです。もし何人かが理論構成の遊戯にふけりたいと望んでも、ヴェブレン以外の誰がその技巧と諧謔とをうまく織り混ぜることができたでしょうか。しかし、正統派的経済学の標準的手法が科学的検討に耐ええないということを納得するために、何かが必要であったとするならば、それは、ヴェブレンが別の一組の前提をもって眩惑的な仕事を成しとげはしたが、しかしそれによって彼はより確なものを少しもうることはできなかった、ということを知ることでした。彼の人間性についての作業概念は著しく改善されたものにちがいがなかった。彼は神秘的な洞察力を有していたにちがいがなかった。しかし、彼は一定のもっともらしい結論を出しえたりしなかった。——この点で彼も他の人と変りはなかったのだ⁷⁾」

こうしてデューイ⁸⁾やヴェブレン⁹⁾の影響下、プラグマティズムの哲学と経済学に興味を抱くようになったミッチェルが最終的に取り組んだのは、貨幣の問題を中心とした経済学の勉強であった。ミッチェルは、それを、ローレンス・ラフリン (J. L. Laughlin) 教授の下で始めた。「ミッチェルの心理学的理論と社会心理学の形成に影響を及ぼしたのはデューイであったが、ミッチェルを経済学に向かうよう仕向けたのは、ヴェブレンとラフリンであった¹⁰⁾。」

当時シカゴ大学の経済学部長であったラフリンは、生粋の俗流経済学的立場から「経済原論」を講義していたが、そのテキストは彼の編集したJ・S・ミルの『原理』で、それは伝統的な自由放任原理へ疑惑を投げかけている社会

哲学の部分をわざと省略したものであった¹¹⁾、と言われている。とすれば、ヴェブレンやデューイはもとより、レープ¹²⁾等の影響を受けて、古典派的・伝統的思考や方法に疑を抱き始めていたミッチェルに、そのラフリンが及ぼした影響はかなり複雑なものであった、と言えるだろう。確かにラフリンは、ジョン・ケヤンズ (JohnE. Cairnes) の古典派理論をもって「最も健全な指南軍」と考えていた、頑固な古典派経済学者であった¹³⁾。しかし彼は、素朴な貨幣数量説に関して古典派との関係を絶っていた。この点で、ラフリンはミッチェルに影響を及ぼした¹⁴⁾、とドルフマンは記している。もともと、経済学に興味をもち始めていたミッチェルを、貨幣・通貨問題を中心とした研究に仕向けたのが、ラフリンであったのだ。(この点はまた後に取り上げたい)。

なおミッチェルは、先に引用した叙述に続けてこう言っている。「ある種の問題が私の興味をひき始めていました。ウィリアム・ヒル (William Hill) は、＜毛織物の増大と関税＞に関するレポートを課題として私に課しました。私は多くの関税演説集を読み、経済理論が適用される用途、およびそれが時に軽くあしらわれる気楽さを、新しい側面から知ったのです。そこで私は、毛織物製造業者に、保護貿易の結果として実際に生じたところのものを洗い出そうと願いました。なすべきことは、統計的資料を集め分析することでした。結局なんら明白な結論を出すことはできなかったにしても、少なくとも私は、議会であれ学会であれ、関税問題をただ討論しているだけの紳士達の観念がいかに皮相的なものであるか、ということを知ったのです。それが、私の最初の＜研究＞でした。——私はそれを明白だと思えるやり方で行いました。つまり私は、できる限り利用可能な資料を追求して、そして＜事実＞だとわかったことをレポートしました¹⁵⁾。」演繹が不毛であるということを知りようになっていたミッチェルは、こうして、理念や理論は何よりも事実と関連づけて展開しなければならない、ということを手伝ったわけである。思えば、こうした志向は、少年時代のミッチェルがスーリー大伯母さんとなした神学上の論議の進め方の中にすでに現れていた。

やがて大学生活も最終学年を迎えた年、ミッチェルは、一つの論文をものに

した。「貨幣価値の数量学説」(The Quantity Theory of the Value of Money)がそれである。当論文は、ラフリン教授が編集者であった『経済学雑誌』(Journal of Political Economy, Vol. 4, March, 1896)に掲載されるという光栄を得た。1896年シカゴ大学を卒業したミッチェルは、さらに大学院へ進み、勉学を続けることになる。

<注>

- 1) 小原敬士『ヴェブレン』勁草書房, 1965年, 33~34頁と松尾博『ヴェブレンの人と思想』ミネルバ書房, 昭和41年, 21~22頁を参照。
- 2) Joseph Dorfman, ⑩, p. 126.
- 3) Allan G. Gruchy, Modern Economic Thought: The American Contribution, Augustus M. Kelley, New York, 1967, p. 247 より引用。
- 4) Joseph Dorfman, ⑩, p. 126.
- 5, 6, 7) Letter from W. C. Mitchell to J. M. Clark, in Lucy Sprague Mitchell, ⑩, pp. 94-95.
- 8) 「シカゴ大学には、人間思想の性質と人間諸事象における哲学の役割について、革新的な見解を有しているジョン・デューイがいた。彼が人間行動の性質について教えていたことは、経済過程の性質に関するヴェブレンの見解と非常にうまく調和していた。ところで、来たる世代の経済学者達にとって最も重要であったことは、デューイが古典派や新古典派の心理学的仮定に隈無く光をあてたことだ。ひとたび正統派経済学の心理学的基礎の正当性に疑が向けられるや、経済行動のあらゆる問題へ新たな攻撃を加えるドアが開られた。ミッチェルが人間行為の性質を正しく理解することに認める重要性は、確に、ジョン・デューイのプラグマテックな心理学との接触から始まる」とグルーチェは述べ、以下続けて彼は、デューイがミッチェルに及ぼした影響について言及している。「……ミッチェルが演繹的思索から帰納的分析へ転じるのに影響を及ぼしたのもデューイであった」と、グルーチェは述べている (Allan G. Gruchy, Modern Economic Thought: The American Contribution, Augustus M. Kelley, New York, 1967, pp. 247-249)。
- 9) ここで、シカゴ大学における当時のヴェブレンの状況を概観しておこう。ヴェブレンは、ラフリン (James L. Laughlin) の助力によって、シカゴ大学にポストを得た。七年もの浪人生活をよぎなくされていたヴェブレンは、ラフリンのおかげでやっと青空をあおいだわけである。こうしてシカゴ大学にポストを得たヴェブレンは、社会主義に関する講義を担当するかたわら、『政治経済学雑誌』に、毎号のごとく論文や書評を執筆した。その大半は経済学の方法や社会主義に関するものであった。ヴェブレンの思想内容は、すべてこの間に築き上げられた、とさえ言われている。ヴェブレンはこうした準備作業の後に、1895年の秋頃から執筆にかかり、4年後の1899年に処女作・『有閑階級の理論』を世に送り、それによって一躍、学会の脚光をあびたのであった (小原敬士『ヴェブレンの社会経済思想』岩波書店, 昭和41年, 43頁を参照)。「ヴェブレンの全思想体系は、ことごとく、本書の中に萌芽の形で含まれていたといっても、言いすぎではない」(小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波文庫, 昭和40年, 解説, 387頁)。まさにヴェブレンをヴェブレンたらしめた時

期のヴェブレンと、ミッチェルは接したわけである。(シカゴ大学におけるヴェブレンについては、小原 敬士「ソースタイン・ヴェブレンとシカゴ大学」—橋論叢, 第23巻第4号に詳しい)。ところで、ミッチェル論者の多くが、ミッチェルとヴェブレンとの関係の密なことを指摘している。例えば、ドーフマンは「ウエズレイ・C・ミッチェルは、ヴェブレンの最初の知的相続人であった」と述べている(The Economic Mind in American Civilization, Vol. 3, New York, 1949, p. 455)しかし、ヴェブレンがいかなる点でミッチェルに影響を及ぼし、従ってどの点において両者がつながるのかということになると、論者によって実にまちまちなのである。詳細は省くが、要するにそこに統一的な見解はない、と言っても過言ではない。そうである限り、ヴェブレンとミッチェルを、いわゆる「アメリカ制度学派」として統括する学説史上の定説的見解も必ずしも説得性をもちえるものとは言えないであろう。何よりも、両者の学説に内在した比較・検討が望まれるわけである。ここでは、そうした比較・検討を試みる上で、示唆に富むと思われる次の立言を引用するだけに留めたい。「ワークマンシップ(産業)と産業資本家のワークマンシップと呼ばれてきたもの(企業)とのヴェブレンの区別は、財を作ることと金をもうけることの区別としてウエズレイ・C・ミッチェルの著作に反映されており、この区別は景気循環に関するミッチェルの生涯の研究の出発点として役立った」(H. W. Spiegel, The Growth of the Economic Thought, Duke University Press, 1971, p. 634)。「……ミッチェルの記述的分析は、産業と企業との区別、つまり明らかにヴェブレンから得られた区別に基いている。『緑背紙幣の歴史』の中の一つのセンテンスから、ミッチェルが当時その区別を用いて思考し始めていた、ということが推察される。その区別は、緑紙幣制下の金・銀および賃金』の中に、二義的ではあるが、より明白に述べられている。しかし『景気循環』の著述の中では、ミッチェルは、その区別を、彼のすべての分析がそれに基いている基礎概念たらしめた」(Paul T. Homan, Contemporary Economic Thought, New York, 1968, p. 394)。「ヴェブレンの社会哲学に非常に目立っていたマルクスの遺産は、ミッチェルの経済学の背景になっている社会哲学には概して欠如している。要するに、後期ヴェブレン主義者達がなしたことは、マルクスに代えてデュローイを、ヘーゲル派のマルクス主義に代えてプラグマティズムを置いたことだ」(Allan G. Gruchy, Contemporary Economic Thought: The Contribution of Neo-Institutional Economics, Augustus M. Kelley. Publisher Clifton, 1974, p. 81)。

- 10) Allan G. Gruchy, Modern Economic Thought, p. 251. なおグルーチェルは、ヴェブレンとラフリンがミッチェルに及ぼした影響について、こう述べている。「ミッチェルの価格分析や貨幣理論への関心は、まず、J. L. ラフリンの指導の下に展開されたが、解釈の骨組—ミッチェルの価格や循環分析はこの枠内でなされた—は、その大部分がヴェブレンの作品から得られた」(Allan, G. Gruchy, ibid., p. 251)。
- 11) 松尾 博, 『ヴェブレンの人と思想』ミネルバ書房, 昭和41年, 22頁を参照。
- 12) J・レープがミッチェルに及ぼした影響を重視しているのがミルスである。彼・ミルスは次のように述べている。「心理学的な面と生理学的な面における行動についてのレープの諸研究は、その内容においてのみならず、科学的な方法の例をなすものとしても、ミッチェルに影響を及ぼした。レープは、ミッチェルに、組織的な行動のある局面を研究するのに明らかに効果的な厳密な方法についての直接的・実際

的な知識を与えた。ミッチェルは、その方法を、行動の他の局面を取り扱うのにも有効である、と進んで評価した。そこには…ヴェブレンの辛らつな批判によって、また思考過程の伝統的な態度へのデューイーの偶像破壊的な取り扱いによって懐疑的にされていたミッチェルの精神に、満足を与える実際的な何かを提示する道具があった。レープのミッチェルに及ぼした影響—これは後のカルフォルニアでの交りを通して確実にされ強化された—は、深くかつ持続的なものであった」(Frederick C. Mills, ⑩, pp. 109-110)。

- 13) 小原敬士『アメリカ経済思想の潮流』勁草書房、昭和26年、170頁。
- 14) Joseph Dorfman, ⑩, p. 126. ミッチェルの思想・学説の形成過程を見ていく上で、彼と J.L. ラフリンの係わりあいを検討してみることは、どうしても欠かせない作業の一つであろう。従って、詳しくは別稿を用意するつもりであるが、さしあたり、J.L. Laughlin, *Journal of Political Economy*, V. 49, December, 1941, pp. 875-81. の参照を乞う。当論文は、ミッチェルがラフリンから受けた影響および彼のラフリンについての見解を、ミッチェル自身が問題にしたものである。また A. Hirsch, *The a posteriori method and the creation of new theory — W.C. Mitchell as a case study*, *History of Political Economy*, 1976, 8(2) pp. 195-206 の参照も乞う。当論文は、グリーン・バックス期の社会経済諸事象の実証的・統計的研究を進めていく過程で、ミッチェルが J.L. ラフリンの均衡論の見地から、やがて社会動態論の見地へたどりつき、帰納法的経済学を提唱するに至る過程を問題にしたものである。
- 15) Letter from W.C. Mitchell to J.M. Clark, in Lucy Sprague Mitchell, ⑩, pp. 95-96.

III

ミッチェルがシカゴ大学から同大学院へと進み勉学を続けた 1890年代は、経済学を学ぶ者にとっては、実に刺激に満ちた時代であった。一方における独占資本の形成と、他方における農民や労働者の圧迫、そこから生じた農民運動や労働運動の高まりは、深刻な社会不安を生み出していた。従ってまたこの時代は、関税、トラスト、鉄道、所得税等をめぐっての種々の論議が展開された時代でもあった。かかる論議の中でも、特に他を圧していたのが、金・銀複本位制をめぐっての通貨制度の問題であった。銀の価格は下り、さらにまた下落し続けていた。銀の貨幣脱化は今や「1873年の犯罪」と呼ばれ、政府への「銀をなんとかせよ」との要求は一段と強まっていた。ここに銀擁護派の要求は、銀貨の自由かつ無制限の鑄造を求める運動として展開された。この運動は、1890年のシャーマン銀貨買上法の通過によって具体化された。この法律のもとに、多量

の銀が財務局に買い上げられたのである。(それはブランド・アリスン法によって買い上げられた量の2倍であった、と言われている)。このことは、他方で金本位制擁護論者に危惧の念を抱かせるに至った。国庫は危い状況にあった。1892年、クリーブランドが大統領に就任した時の金準備は、約2億ドル近くあったが、それが年々しかも急激に減少していった。この金準備の減少は、かってないほどの深刻な清算時代をひきおこした。かの1893年の恐慌である。この恐慌は、多数の大手の会社や金融機関の破産を生じさせ、多くの鉄道会社を管財人の手へ渡した。「失業とストライキと不満と、そして多くの実生活上の苦しみとが、1893年と1894年との冬の特徴となった。」ここにクリーヴランドは、1893年8月1日、シャーマン銀買上法の廃止を要求した。このクリーヴランドに対立して立ったブライアンは、1896年、「アメリカ史上最もはげしく、また最も重要な政治運動のひとつに数えられる選挙戦をおこなった」。主な争点は、銀の自由かつ無制限な鑄造ということにあった。戦はブライアンの決定的な敗北に帰し、ここに、金・銀複本位制をめぐってなされた長い通貨論争に終止符がうたれた。しかし自由銀擁護論者の勢力はかなり残っており、金本位制が公式に採用されたのは、その選挙の四年後のことであった¹⁾。

以上のような状況に加えて、ミッチェルが入学したシカゴ大学は、すぐれて「現実主義的な雰囲気²⁾」を有しており、ここでも通貨問題は活発な議論と検討の対象とされていた。それに、ミッチェルがその下で勉学していたラフリンは、自由銀擁護論者との間に貨幣数量説をめぐって激しい論争を展開していた³⁾。またその論争にあって、反貨幣数量説派の指導的人物であった彼は、当時の学生の関心を通貨問題に向けさせるに熱心であった⁴⁾。とすれば、当時経済学の勉強を始めていたミッチェルが、貨幣・通貨問題に関心を示したのは当然の成行であった、と言えるだろう。ドーフマンの記するところ、「ラフリンは、学生をして、貨幣数量説がそれで示されている、後にミッチェルが素朴な<機械論的見解>と呼んだところのものに疑を抱かせ、かつ価格決定に作用する実業取引の諸問題を強調させることに成功した⁵⁾。」この面で、ミッチェルもラフリンの影響を強く受けた。そして彼は、彼の大学生生活の最後の年に「貨幣

価値の数量学説」(1896) という論文を書いたのであった。

その論文は、当時の通貨論争に参加したものであり、若さゆえの粗雑さはあるが、今なお読む興味を起させるものである。続けてバーンズの述べるところによれば、この論文の中には、ミッチェルをして後に有力な経済学者たらしめる特徴のいくつかが、すでに現れていた。基本的論点への関心、分析の技量、明晰さ、および統計的検証への志向といったものがそれだ。つまりミッチェルは、通貨量と物価水準との間の関係を取り上げて、当時の通貨論争の根底をなしていた科学的論点に正面から取り組んでいるのである。また彼は、問題を単純な諸要素に分解することにおいても、推論を整然と組み立てていくことにおいても、その技量をいかんなく発揮している。この論文において最も目立っているのは、ミッチェルが作用諸力の複雑さはもちろん、何よりも経験的検証の必要性を力説し強調していることだ⁶⁾。つまり、「演繹的推論は……もしそれが帰納的研究によって検討かつ訂正されなければ、研究者をとんでもない誤に導くことになりかねない⁷⁾」とミッチェルは述べている。かくしてここに、ミッチェルの研究態度が初めて公に示されたわけだ。そして事実ミッチェルは、この論文でなした主張に忠実に、以後、緑背紙幣（＝グリーン・バックス）を中心とした通貨と物価の関係の歴史的かつ実証的研究に手を染めることになるのである。

さて上述の論文をものにして、1896年にシカゴ大学を卒業したミッチェルは、さらに勉学を続けたく思ったが、「これ以上家族のささいな収入に負担はかけたくないし」、かといって「お金をかせぐために切実な勉学を中止したくない」というジレンマに落ち入った。しかし、このジレンマはすぐに解決された。デューイやラフリンの手助けによって奨学金を得ることができたからだ⁸⁾。ミッチェルは、この奨学金を基にして大学院へ進み、そこで3年の歳月を、もっぱら南北戦争後の緑背紙幣を中心とした勉学に費した⁹⁾。正確に言くと、その間の1898年に、彼は欧州留学の機会を得て、ハレ (Halle) のヨハネス・コンラード (Jahannes Conrad) とウィーン (Vienna) のカール・メンガー (Carl Menger) の下で勉学している。しかしこの留学は、ミッチェルに広

い視野を養わせはしたものの、さほど実質的な影響を与えるものではなかった、と言われている¹⁰⁾。留学を終えて帰国した彼は、1899年、「法貨法の歴史」(History of Legal Tender Act) という論文を完成し、それによって学位を得た。

最優秀の成績で学位を得たものの、すぐには就職口の見つからなかったミッチェルは、しばらくラフリンの助手をした後、ワシントンの国勢調査局に職を得た。ミッチェルは、1899年から1900年までのちょうど一年間をそこに務めたが、この務を通して彼は、「私自身が主人となる以外は決して幸福でありえない」ということを知った。そこでも「私＜自身＞の問題を見つけ私＜自身＞の関心を育み続けた」と言うミッチェルにとって、組織の一員としてなす仕事は苦痛ですらあったらしく、彼はこう記している。「国勢調査局のような所で生きていくためには、私は自己調整のために私自身と毎日戦わなければならなかった」と。従って、シカゴ大学へ帰れるようになったミッチェルが、それを心から喜んだことは言うまでもない。当時を回想した妻あての手紙に彼は次のように書いている。「1900年の秋に教師（インストラクター）としてシカゴ大学へ帰るチャンスに、私がいかに飛び上って喜んだか、あなたは想像できるでしょう。そこでだと、私のやりたいことをやり、しかもそれを私の選択するままに展開できる、ということを知ったんです¹¹⁾。」

かくして再びまいもどったシカゴ大学で、ミッチェルは教師として教えることよりも、むしろ研究に関心を置いた二年間を過した。この間、ピッツバーグ(Pittsburgh)に出かけ鉄道ストライキについての話をしたことを契機に、シカゴ・トリビューンの論説委員として迎えられた彼は、数ヶ月にわたってその新聞に記事を書くという体験をしている¹²⁾。

それを除けば、彼のシカゴ大学在職中の大半の時間は、もっぱら彼の学位論文の拡充に当てられた。そしてこの成果を彼は『緑背紙幣の歴史』(History of the Greenbacks) という著作にして1903年に出版したのであった¹³⁾。これは二部——そのうちの一部は学位論文——から成るミッチェルの処女作であった。この著作は、「1903年の出版以来、南北戦争インフレに関する標準的な権威の

書として役立った¹⁴⁾」と言われる、それ自体で注目に値する著作であったのみならず、ミッチェルのいく先を決定した書物でもあった。つまり、彼のその後の諸研究の大部分が、この著作の「自然的成長¹⁵⁾」に他ならなかった、と言われている。何故か。——先走ることになるが、大筋を見失わないためにも、以下この点を先取りして簡単に見ておきたい。

元来、南北戦争の戦費調達の一方法としてとられた緑背紙幣（＝グリーン・バックス）の発行は、不換紙幣という未解決の問題を国にかかえこませることになり、後々までそれは法的にも経済的にもやかましい問題を残すこととなった¹⁶⁾。19世紀末のアメリカにおける最も重要な問題の一つが、やはりそれであった。物価の低落と債務者の困窮が相変らず続いており、それが当時、すでに見たように大学の内外での激しい通貨論争を導き出していた。こうした状況の下で、ミッチェルは『緑背紙幣の歴史』を書いたのであった。この著作における彼の関心は、その副題・「特に緑背紙幣の発行の経済的結果：1862—65」にも大方うかがえるように、1862—63に施行された法貨法の経済的結果に向けられていた。そこで彼は、1861—65年の戦争好況期の貨幣購買力の変動が国民所得の分配に及ぼす影響を分析したのである。そしてここに彼は、労働者、地主、資本家、企業経営者等の実質所得の変動を分析したのであった。ところで、そうした研究はミッチェルを一層広範な問題に導かざるをえなくなった。それは、労働者、地主、資本家……等々の実質所得の変動が、富の生産と消費にいかなる影響を及ぼすか、という問題であった。この問題に近づくには、南北戦争後の限られた時期を問題にするだけでは不十分であった。そこで彼は、その問題から離れて、「価格システムのより一般的な分析」を行うこととなった。ここにミッチェルは、その分析を行うための「準備作業」として景気循環の研究に立ち向うこととなったのである。そしてこの努力の成果が、彼の代表作である『景気循環論』（Business Cycles, 1913）として結実したのであった¹⁷⁾。それは、三部の内容をもつて構成された四ッ折版の600頁をこす大著で、ミッチェルの見解を総括的にとりまとめたものであった、と言われる。ミッチェルは、この著作三部の内容を、それぞれ後の研究によって拡充・一新して刊行した。

つまり、その著作の第一部は『景気循環——問題とその設定』（Business Cycles—The Problem and Its Setting, 1927）として、第二部は『景気循環の測定』（Measuring Business Cycles, 1946）として出版された。その第三部については、それを拡充・発展させるにはかなりの時期を要するし、のみならず当分その見込みもないということで、ミッチェルは、第三部をそのままの形でよいとして1941年に再版したのであった。『景気循環とその諸原因』（Business Cycles and Their Causes, 1941）がそれである。もっとも彼は、その死に至るまで第三部の拡充の仕事を続け、その遺稿集が、バーンズにより『景気循環の過程』（What Happens During Business Cycles, 1951）として編集・刊行された¹⁸⁾。（以上、詳しくはまた順を追って取り上げたい）。

まさしく、ミッチェルの諸研究の大部分は彼の処女作・『緑背紙幣の歴史』の「自然的成長」に他ならなかった、と言えるであろう。また以上見てきた一連の諸研究におけるミッチェルの態度は、「あくまで実証的であり、かつ歴史的であった¹⁹⁾」と言われている。ミッチェルが大学時代に書いた処女論文中に表明した彼の研究態度は、こうして彼の生涯を通じて貫かれた、と言えるわけである。もっともミッチェルの業績は、以上の貨幣論や景気論につきるものではない。以下、もとに立ち帰って、順を追って見ていきたい。

<注>

- 1) H・U フォークナー著、小原敬士訳『アメリカ経済史』（下）至誠堂、1969年、678～682頁、小原敬士『アメリカ経済思想の潮流』勁草書房、昭和26年、173～174頁、Arthur F. Burns, ⑩, p. 10 を参照。
- 2) Arthur F. Burns, ⑩, p. 10.
- 3) かかる論争を後にミッチェル自身が問題にした論文がある。The Real Issues in Quantity Theory Controversy, Journal of Political Economy, V. 12, June 1904, pp. 403-8 が、それである。
- 4) 「自由銀論者は、1873年以來の価格低下は、銀の本位貨幣としての使用を禁止した1873年の鑄貨法によって引き起されたと主張した。明らかに彼らの論議は素朴な貨幣数量説に基づくものであった。つまりこうだ。＜本位貨幣＞の供給が価格の水準を決定する、従って鑄貨法つまり＜1873年の犯罪＞が価格の＜悲惨な＞低落に対しては責任がある、だから複本位制への復帰が価格を＜適切な＞水準にひきもどすことになるであろう。ラフリンは彼のエネルギーの多くを自由銀論者の攻撃に向けた。90年代には彼は頭から貨幣数量説の妥当性を否定した。価格が貨幣量によって

決定されるという理論は、彼の感ずるところ、何んら演繹的な根拠を有するものでもなければ、また何んら帰納的根拠を有するものでもなかった。そこで彼は有能な学生を刺激して(貨幣)理論の研究をさせた」(Joseph Dorfman, ⑧, p.127)。ところで、素朴な貨幣数量説に反対したラフリンは、次のように主張したのであった。「物価は凡ゆる種類の購買力によって影響される。財貨に対する購買力若しく必要は単に公衆の手中にある貨幣量から起こるだけでなく、使用される信用量からも起る。貨幣、銀行政策、紙幣、金や銀に対する信用代替物、小切手、為替、帳簿信用等の急速な使用は、すべて財貨需要を増大せしめ、従って物価を高める作用を営む。それゆえに、たとえ金属貨幣の供給が少しも変わらなくても、物価はそれに影響を与える他の要因、即ち信用の変化によって変動する、と。このようにして、結局、彼は1873年以来、信用や信頼の著しい崩壊が起ったのであり、従って物価は、いうところの金の欠乏によって低落したということとはできない、と結論するのである。ラフリンはほぼこのような立場に立って、貨幣・金融問題に関する多くの書物を書いた」(小原敬士、上掲書、昭和26年、171～172頁)。なお最近、ラフリンの貨幣数量説をめぐる論争を問題にした論文に、Girton, Lance/Roper, Don, J. Laurence Laughlin and the Ountity Theory of Money, *Journal of Political Economy*, 86 (4), 599-625 がある。ただしこの論文は、ラフリンとフィッシャー (Trving Fisher) との論争を中心に扱っている。

- 5) Joseph Dorfman, p.127.
- 6) Aurthur F. Burns, p.11 を参照
- 7) *Journal of Political Economy*, March 1896, p.157.
- 8) Letter to Lucy Sprague, October, 18, 1911, in Lucy Sprague, ⑧, p.63.
- 9) 大学院時代にミッチェルは下記の論文を発表している。*Greenbacks and the Cost of the Civil War*, *Journal of Political Economy*, Vol. 5, March 1897, pp. 117-56.
The Value of the Greenbacks during the Civil War, *Journal of Political Economy*, Vol.6, March 1898, pp.139-67.
Resumption of Specie Payments in Austria-Hungary, *Journal of Political Economy*, Vol.7, December, 1898, pp.106-13.
The Suspension of Specie Payment, December, 1861, *Journal of Political Economy*, Vol.7, June1899, pp.289-326.
- 10) Frederick C. Mills, ⑧, p.110 と、春日井薫『ウェヌレイ・クレア・ミッチェル 小伝, W.C. ミッチェル著, 春日井薫訳『景気循環一問題とその設定』文雅堂書店, 昭和36年, 1頁を参照。
- 11) Letter to Lucy Sprague, October, 18, 1911, in Lucy Sprague Mitchell, ⑧, pp.63-64 を参照。このパラグラフには、ミッチェルの性格・気質といったものを読みとることができるであろう。ところでミッチェルは、自己の思想形成に際しては、彼の生活環境よりも、むしろ彼の性格や気質が多く影響した、と述べている。つまり、「私の生活が私の性格を形作った以上に、私の性格が私の生活を決定した」(Letter to Sprague, *ibid.*, p.62) と言うミッチェルは、彼の半生を語った後、次のように述べている。「おわかりでしょうが、以上の私の話のすべては、つまるところ私の気質を中心に語ったことになり、もっと直接的に言いますと私の知的発展からして気質の結果だと考えられる特定の方向を中心に語ったことになります」(Letter to Sprague, *ibid.*, p.65) と。以下続けてミッチェルの言うところを訳出しておこう。「私は、私に関心を抱いた事へは私自身のやり方をしたな

ければならなかった。もしそうすることができたなら、細かいことが問題になるということはほとんどありませんでした。なお付言すれば、私は必ず私自身のやり方をもたざるをえなかったわけですが、そのために絶えず戦うことはしませんでした。厳しい反対が私にひきおこす怒りの感情を嫌っていたんです。また私は、私のやり方がよりいいのだということを他の人に説得して理解させることに時間を浪費することよりは、小さな問題では他の人の好きなようにやらせておくように、常にしているんです。この特質は、私を余り従順でなくするわけですが、しかし愛想のよい研究者にもするんです。もし気に入ったやり方で、私の好きな種の研究をなす自由な領域が与えられるなら、私は喜んで、他の誰かに名目的な指導者の地位についてもらい、細かいことはその人の好き勝手にやってもらいます。実際私は両方の特質を過度に有しているのです。つまり、私の本質である独立心は高じて尊大さとなりまし、細かな点での愛想のよさは軽卒さへ通じるのです」(Letter to Sprague, *ibid.*, p.65).

- 12) Letter to Lucy Sprague, October, 18, 1911, in Lucy Sprague Mitchell, ㊦, p.64 を参照。
- 18) 大学院卒業後から処女作・『緑背紙幣の歴史』までの間、つまりワシントンの国際調査局時代とその後の二年のシカゴ大学奉職中に、ミッチェルは下記の論文を発表している。
 Preparations for the Twelfth Census, *Journal of Political Economy*, Vol. 8, June 1900, pp.378-84.
 The Inheritance Tax Decision, *Journal of Political Economy*, Vol.8, June 1900, pp.387-97.
 The Census of Cuba, *Journal of Political Economy*, Vol.9, December 1900, pp.125-31.
 The Census of Porto Rico, *Journal of Political Economy*, Vol.9, March 1901, pp.282.-5.
 Five Articles on 1901 Steel Strike, *Chicago Tribune*, 1901, July 21, July, 22, July 23, July 24, July 27.
 The Circulating Medium during the Civil War, *Journal of Political Economy*, Vol.10, September 1902, pp.537-74.
- 14) Arthur F. Burns, ㊦, p.12.
- 15) Frederik, C. Mills, ㊦, p.115.
- 16) H. V. フォークナー著、小原敬士訳『アメリカ経済史』(下) 至誠堂、1969年、667頁。
- 17) 以上は、Frederick C. Mills, ㊦, pp.116-117 にそくして、小原氏がとりまとめている箇所(小原敬士『アメリカ経済思想の潮流』勁草書房、昭和26年、215~216頁)の叙述を、ほぼそのまま借りた。またバーンズは、この点について次のような簡潔な叙述を与えている。「貨幣数量説から、ミッチェルは、まず特定の貨幣的インフレの分析に移り、次いで価格システムの進化とそれが人間行動に及ぼす強い影響の分析に移り、しかる後に<価格の反覆的再調整>の分析に移った、かくしてこの最後のそれが彼を景気循環に導いた」(Arthur F. Burns, ㊦, p.19). なおその過程の推移については、Letter to Lucy Sprague Mitchell October, 18, 1911, in Lucy Sprague Mitchell, pp.65-66 に、ミッチェル自身による叙述を見ることができる。

- 18) W. C. ミッチェル著，種瀬・松石・平井訳『景気循環論』新評論，1972の訳者あとがきと，J. M. Clark, Preface to Social Economics, New York, 1967, pp. 390-394 を参照。
- 19) 小原敬士『アメリカ経済思想の潮流』勁草書房，昭和26年，216頁。

（未完・以下次号予定）